

現場で奮闘する高校の英語の先生を応援する情報誌



英語の先生 応援マガジン

Learning Teacher Magazine Winter 2018

PLAN



課題と成果を

次年度につなぐ

アクション・リサーチ

ACT

DO



CHECK



成長し続ける教師のための、主体的・対話的で深いプロセス

生徒の変化を見ながら、より良い授業を目指し改善する——

アクション・リサーチのエッセンスを取り入れ、“振り返り”を習慣化しませんか。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するための アクション・リサーチのすすめ

「コミュニケーション重視の英語教育」の必要性がいわれる中、CLT (Communicative Language Teaching) をベースとする授業の在り方や、その評価方法を巡り、先生方は模索を続けておられることでしょう。そんな中で注目を集めているのが「アクション・リサーチ」です。アクション・リサーチとは何か、そして、アクション・リサーチを使った授業改善の可能性について、名古屋外国語大学の佐藤一嘉先生にお話しいただきます。年度末を前に、本年度の学びを振り返り、「主体的・対話的で深い学び」に続く授業の作り方を考えてみましょう。

取材・文_田中洋子 撮影_おおさきこーへい (cre8orboi)

授業の実践と研究を結び アクション・リサーチ

教育や教師教育におけるアクション・リサーチとは、PDCAに類似したプロセスに沿って、授業の改善や教師の成長を実現する手法だ。授業実践 (action) → 授業研究 (research) → 授業実践 (action) を連関させて繰り返す中で、スパイラルを描くように授業の質が高まり、教師や学習者の力が伸びていくという。

名古屋外国語大学の大学院 TESOL (英語教授法) コースでも、アクション・リサーチを必修科目として取り入れている。科目等履修生として、アクション・リサーチの講座のみ受講できる制度もあり、小・中・高校の英語の先生たちが、大学院生として熱心に学んでいる。

なぜ今アクション・リサーチが注目されるのか。コース主任の佐藤一嘉先生 (英語教育学科教授) は次のように語る。

「私も高校で教えていたのでよく分かるのですが、現役の先生たちは忙しく、単発のワークショップなどに出席しても、つついその場限りになりがちです。授業改善にせよ、教師教育にせよ、単発的・短期的な研修では効果が薄いということは、研究結果として明らかになっています。一方アクション・リサーチは、授業とリンクして行う継続的な Teacher Development でもあります。忙しい先生方でもコツさえ分かれば、目標とするCLTベースの授業を、無理なく行えるようになります」

アクション・リサーチは、①Input (課題発見)、②Planning (ゴール設定と授業計画)、③Action (授業実践)、④Reflection (実践の省察)、⑤Revision (プランの修正)、⑥Repeat (修正を反映した授業を行い、また①から繰り返す) の、6つのプロセスをつないで運用される。

このサイクルを続けながら、定期的な授業の振り返りと必要な修正

を行うことで、らせん階段を上るように少しずつ、CLTを中心とした授業がクラスのニーズに最適化されていくのである。

6つのプロセスの循環で CLT型の授業を向上させる

アクション・リサーチの流れに沿ってCLT型授業を行う例を、プロセスごとに見てみよう。

【教室での実践例】

① Input

(ニーズや課題を見つける)

英語のアクティビティについて、アンケートを取ったところ、自信がないので楽しめないという生徒が、予想以上にいることに気付いた。また、受験対策も大事だが、やはり英語を話せるようになりたいという声も多かった。

② Planning

(授業プランを考える)

「英語に苦手意識がある生徒たち

佐藤一嘉先生

SATO Kazuyoshi

名古屋外国語大学外国語学部英語教育学科 教授

専門は、第二言語習得研究、外国語教授法、教師教育。名古屋大学卒、PhD in Applied Linguistics at The University of Queensland。高校で7年間英語を教えた後、オーストラリアの大学院でTESOL（英語教授法）を学ぶ。帰国後、TESOLの勉強会やワークショップを精力的に開催。現在コース主任を務める同大学院のTESOLコースでは、教育現場の状況や生徒に合った指導法を開発するためのアクション・リサーチ、その研究発表などを取り入れ、実践的な教師教育に取り組んでいる。「アクション・リサーチから学ぶ英語教授法」（シンクンライム社）の授業ビデオシリーズを監修。



アクション・リサーチは 授業とリンクして行う 継続的な Teacher Developmentなのです。



に、モチベーションを持たせる」をテーマに、以下を中心とする授業プランを策定。

- ①何をインプットし、何をアウトプットするのか、毎回の授業の目的やポイントを、生徒にはっきり伝える。
- ②身近なトピックを選び、ペアワークなどで英語を話す機会を増やす。
- ③スピーキングとライティングのパフォーマンス・テストを導入。その後、生徒自身に自己評価をしてもらう。

③Action (プランに基づき授業を実践)

趣味、好きな食べ物、行ってみたい国などのトピックを取り上げ、アクション・リサーチの事例集を参考にしたアクティビティを行う。教材なども事例集をもとに準備。

④Reflection (一定期間を経ての振り返り)

学期半ばに、再び生徒にアンケート調査を実施。

前向きな感想：「友達と英語で話せて楽しかった」「少し自信がついた」

課題：「言いたいことが言えず疲れた」「言葉が出てこなくて会話が続かない」

⑤Revision (修正)

「会話が続かない」という生徒の声が多いことに着目。‘Pardon?’ ‘What did you say?’ ‘Could you say that again?’など、Communication strategiesを紹介することに。

⑥Repeat (修正した授業の実践)

一連の流れを見た先生たちからは、「これに近いことなら、普段からやっているよ」という声が聞こえてきそう。事実、アクション・リサーチは、各プロセスの意味とつながりを意識して行えば、誰でも始められるし、確実に授業を変えることができる。しかも4技能全ての授業に導入が可能だ。

他の教師の実践に学び 成功事例をまねてみる

一方、授業改善のために、CLT

ベースのアクティビティを考え、評価方法を考え、さらに必要な教材や資料もゼロから準備するとなると大仕事だ。ただでさえ校務に追われる教師の負担は膨らみ、やってみたくてもハードルが高く思えてしまう。しかし佐藤先生は言う。

「ゼロから自分で全部やる必要はありません。CLTの成功例はすでにたくさんあり、詳細な事例集も出ていますから、初めは他の先生のアクティビティをまねればよいのです。必要なワークシート、教材、パフォーマンス・テストなども、コピーやダウンロードで入手し、自由にアレンジを加えて活用できます。この方法なら、忙しい先生たちも無理することなく、授業改善に挑戦していただけるのではないのでしょうか」

授業改善を成功させるポイントは、アクション・リサーチのスパイラル方式で振り返りと修正を繰り返す、生徒の反応に注意を払いながら、少しずつ授業を変えていくこと。そして、他の教師の優れた実践を、積極的に共有すること。特に

<Input>と<Revision>については、参考になる事例が多い。

例えば成功事例のワークシートを完全コピーすることから始めても、「やがて誰もが見事な独自のワークシートを作り、生き生きとしたCLT型の授業を展開し始める」。そう佐藤先生は太鼓判を押す。

「主体的・対話的で深い学び」に向けて

個人が始めた実践が、時には全校規模に広がっていくこともある。

高校2年生を指導するK先生は、ドリル形式のテキストを宿題に回し、全てワークシートでCLT中心の授業を行うことにした。1年ほど続けるうちに、クラスは中間考査と期末考査で、平均点で20点ほど他のクラスを上回るまでになった。翌年からは英語科の先生がチームとなり、一斉にK先生のワークシートを使った授業を実施。これを3年間継続したところ、3年生全体の大学入試の成績が大きく伸びた。

K先生の実践は、CLTが「主体的・対話的で深い学び」に直結し、成果を上げた好例といえるだろう。トピックベースの対話で自己表現をさせると、生徒は互いに学び合い、英語もトピックについても、学びが深まっていくのである。

「コミュニケーションの定義は、<expression><interpretation><negotiation>です。<negotiation>は対人的な「やりとり」であり、日本の英語コミュニケーション教育では、この分野の練習が非常に不足し



名古屋外国語大学の大学院TESOL（英語教授法）コースのアクション・リサーチでは、大学のアドバイザーや参加している他の教員の助言をもとに授業案の改善と実践報告を繰り返す。



ていますから、CLTでは特に力を入れることが大切です」（佐藤先生）

アクション・リサーチを3年続けると、授業は大きく改善され、教師も自信が持てるようになる。新任、中堅、ベテランの違いは問わず、日本人の先生でも外国人の先生でも同じだという。

「先生が変わり、授業が変わると、生徒も変わり、目に見えて力が付いてきます。こうして4技能全てで英語力が伸びれば、おのずと試験結果も向上しますから、大学入試もまったく怖くありません。受験が迫るにつれて先生が不安に負け、問題集中心の授業に戻ってしまうのは逆効果です」

プロセスを追って物事を前進さ

せるアクション・リサーチの手法は、望ましいCLT型授業の実現を、手の届くものにしてくれそうだ。

「思い切って始めてみれば、必ず生徒の変化に気付くはず」と佐藤先生。最終的には学校全体に実践を広げ、カリキュラム自体を改善していければベストとのこと。

年度末に向かうこの時期は、改めて自分の授業を顧みる好機だ。振り返りを通して、クラスのニーズや課題を考えると、あなたのアクション・リサーチのスパイラルは、<Input>を基点に、もう動き始めているかもしれない。

名古屋外国語大学ホームページに、これまでのアクション・リサーチの実践報告が掲載されている
<https://www.nufs.ac.jp/workshop/action-research/>

授業の「完全コピー」にも最適な実践事例集

アクション・リサーチを通して、授業改善に取り組む教師たちの成功事例や、教師自身によるオリジナル教材、ワークシートなどを掲載している。

『フォーカス・オン・フォームでできる！ 新しい英文法指導アイデアワーク 高校』『ワーク&評価表ですぐに使える！ 英語授業を変えるパフォーマンス・テスト 高校』ともに佐藤一嘉編著、明治図書出版

